

口頭発表「僕たちが小動物を飼育管理すること」 ～小動物のために取り組む毎日の飼育管理が自分の成長に繋がるとき～

星川孝平※ 岡本雅乃※ 乾 貴人※ 南部のどか※ 武井慶子※※

はじめに

2020 年春、奈良県立山辺高等学校に「自立支援農業科」が新設されました。自立支援農業科では知的障害のある生徒を対象として、高等学校の教育課程が実施され、特に農業に関する探究的な学習が行われています。今回は、この学科に学び直しを希望して入学した 4 名の生徒が「農業クラブ」の活動として、放課後と休日に継続的に小動物と向き合う中で、動物たちから学び、どのように変化してきたのか、そしてどのような自立の道を歩み始めたのかを、発表させていただきたいと思います。

1 彼らが入学を希望した理由

彼らは就労経験があります。その彼らがどうして学び直しを決意したのか。

- ・自分で考え、工夫をし、実行できる人間になりたい。
- ・職場でも色々な指示が理解できるようになりたい。
- ・語彙を増やして、いろんな人と会話ができるようになりたい。
- ・毎日学校に通うことからやり直したい。
- ・高校の勉強を学びたい。

2 彼らと小動物との出会い（彼らと私の関りから）

私は特別支援学校での勤務は計 32 年になります。2016 年から山辺高校に高等養護学校の分教室が設置され、（山辺分教室）そこに 2018 年から 4 年間勤務させて頂きました。2019 年から 2021 年までは山辺高校とのインクルーシブ授業（総合実習）や分教室の総合的な学習の取り組みで小動物たちと関わってきました。小動物たちのことを知るために山辺高校の先生たちからも学び、毎日管理を担当させていただきながら、愛玩動物飼養管理士 1 級を取得しました。私は現在、保護者として山辺高校と繋

がっており、「学校飼育動物の命を守る会」（PTA のボランティアの会）の代表としてこの小動物舎に関り、毎日 19 時からと休日、ウサギ・モルモットの体調管理に来ています。ゲストティーチャーとして分教室に授業をしに来てくださった奈良県獣医師会の三本先生はじめ、小鳥と小動物の病院の院長辻岡先生から、現在も多くのことを学んでいます。

さて、今回の 4 名は、私が代表をしている知的障がい者のダンスチームに所属しています。その彼らが、私の小動物の飼育管理の話を聞き、休日に見学に来たことが、彼らと小動物の出会いとなりました。

自立支援農業科について募集要項が出ると「先生、僕、山辺高校で動物たちに出会って、本気で学びたいことができた。この高校で勉強がしたい。」「私、モルモットのことが大好きだから、学校にほとんどいかなかった私だけど、山辺高校でこの動物たちの勉強ができるならやり直してみたい。」など、自分たちの心境の変化を話してくれるようになりました。

そして 2022 年 4 月、彼らは自立支援農業科 1 期生として新生活をスタートしました。

1 年半、山辺高校で学習した彼らは、毎日小動物に会えることを楽しみに飼育管理をしています。

そんな彼らの姿を彼ら自身の発表から感じていただければと思います。

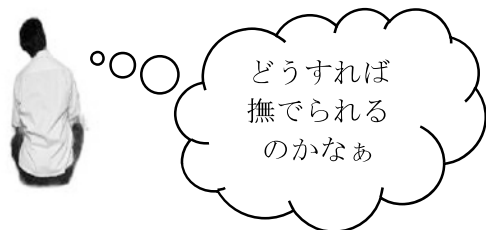
3 飼育管理をして気づいたこと

【星川孝平】

ウサギを主に担当している星川と申します。

ウサギの行動の自由を考え、僕たちはサークルを小動物舎の中に設置し、その中で自由に遊ばせることを実施しています。これは武井先生がここで管理をしながら、実践されていたことで、僕たちが引き続き実践していることです。当初ウサギたちと

の関係がまだとれていない僕は、先生とウサギたちとの関係がとても羨ましく、「早く撫でられるようになりたい」と思い、ケージに近づいて手を入れると逃げられ、怖い顔になったウサギに警戒されてばかりでした。少し慣れてきて、近づいて来てくれるようになって、頭をなでる、体を触るといったことをすると、警戒したようにケージの角ににげられていました。



その時、先生に「力が強すぎて、痛がっているのでは？」と意見をもらい、僕としては、触れているか、触れていないかぐらいの力で、そっと頭を撫でてみることにしました。すると、初めて撫でることができました。それから毎日続けているとウサギが、自分から、側に寄って来てくれるようになりました。

先生は爪切りや、ウサギが病気になると、ひとりで抱っこしながら投薬し、強制給餌ができます。

僕も愛玩動物飼養管理士の勉強をし、一級を取得して、先生に「抱っこができるようになりたい」といって、初めは先生の補助から練習し、一年間、毎日練習してきました。そして現在ようやく安全に抱っこができるようになりました。

僕が一番思い入れのあるウサギは、ツメダニに侵され、不正咬合で亡くなってしまった「ホーランドロップイヤーのボンちゃん」です。僕が初めてあった頃には、すでに治療中で、ツメダニ治療は終わっていましたが、不正咬合が見つかり、食べることができず、先生や分教室の生徒さんたちが、ペレットをふやかして、少しずつ食べられるように口に運んでいました。また、弱っていてもサークルに出たがるので、他のウサギとは別のサークルでゆっくり遊ばせていました。

僕が見学に行った時、調子が良い時は、耳を広げて僕の周りを走り回ったこともありました。



ボンちゃんは人懐っこく、撫でられている姿が嬉しそうに見えて、とても愛らしく感じました。僕は、初めてこの命が助かりますようにと願ったのを覚えています。

僕はこの山辺高校で、小動物に出会ったことで、多くのことを学んでいます。

管理をすると言うけれど、管理の手順を考えることが得意ではないので、時間がかかってしまいます。すぐに「わかりました」と返事をして、忘れてしまうこともしばしばあります。人が話していることを最後まで聞いて、分からないことはその時に質問することや、聞いたことを連絡することも、苦手です。面倒なことは、後回しにってしまうと注意を受けることも沢山あります。

それでも僕は、ここで小動物を好きになれたことを大切にしたいです。できれば卒業して動物病院に就職し、働きながら勉強して、お金をためて専門学校に通い、愛玩動物看護師の資格を取りたいです。



【岡本雅乃】

モルモットを主に担当している岡本と申します。

私が小動物舎を管理している中で出来るようになった事は、学校に毎日通えるようになった事です。

私は、ひとりっ子だったこともあり、集団での行動が苦手で、飼っていたハムスターが、兄弟であり、家族と同じぐらい大切でした。

小学校に行くことも私にとっては当たり前のことではなく、周りの人と比べて、何をするにも、人一倍時間がかかる私には、

しんどいことでしかありませんでした。そのうち出来ない事が多くなり、行き辛くなり、引きこもって行くようになりました。学校で勉強した思い出などありません。

そんな私も、2年間介護施設で働いたことがあります。任せてもらえることもなく、職場の人の話もあまりよくわかりませんでした。

ダンスを始め、少しみんなと話せるようになったとき、武井先生にモルモットの話の聞き、見学に行くようになりました。小動物舎に行くと、モルモットが「あっ来た〜。」と言うような顔をして、私の顔を見て、待っていてくれるような気がしました。その顔が見たくて、「この学校なら続けて行ける、勉強してみたい」と思うようになりました。

動物園やペットショップ等ではなく、この小動物舎のモルモットたちが、私にとって大切なのは、私が来るのを待っていてくれるからです。

「お水替えて」「チモシー食べたい」などのプイプイという声を聞くことで、私が必要とされていると毎日感じます。「その声に応えたい」それだけで、今は勉強も頑張っています。私にとっても、モルモットたちにとっても、お互いが必要で、必要な存在になるために、私はモルモットたちのことを、知ろうと思いました。



この小動物舎には生まれつき左足が奇形のモルモットがいます。名前は「白玉」です。

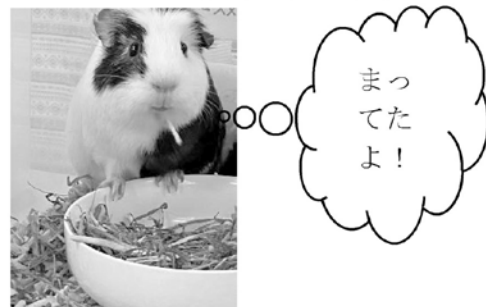
初めて白玉と会った時、生まれつき奇形である足を自分で自由に動かす事ができませんでした。自分で足を動かせるようになるには、どう支援をしたらいいか考えました。武井先生から、足の裏がアレルギーを

起こして赤くなっているの、おがくずを広葉樹に変えていると聞きました。

「あと、できること?」と相談すると、先生が病院で獣医師に相談してくださり、マッサージに取り組むことになりました。毎日、毎日、優しくマッサージしてあげました。すると今では、母親の「大福」のように、チモシーを食べられるようになり、歩けるようになりました。

マッサージをすることで、私が願ったことは、歩けるようになって、自分で好きな所へ移動できるようになって欲しいということでした。チモシーやお水を自分で食べることができるようになることは、生きる力になると考えたからです。

モルモットはとても怖がりです。そのため、仲良くなることは簡単なことではありませんでした。私は、毎日、飼育管理をしにくることが、「また来てくれる」という信用に繋がると思えるようになり、今では毎日登校することができています。小動物の飼育管理をするようになり、「責任をもつ」ということを実感するようになりました。今は毎日待っていてくれるモルモットのために「責任を持って存在できる人になりたい」と思えるようになりました。



私は今、この小動物舎で一番長生きしている「MONちゃん」(雄9歳)を譲り受け、一緒に生活しています。私も愛玩動物飼養管理士の勉強をしています。「終生飼養」の大切さを感じています。MONちゃんと少しでも長く過ごせるよう、楽しい思い出が作れるよう頑張りたいと思います。卒



業後の私の成長を MON ちゃんに見てもらえるよう頑張ります。

【乾 貴人】

私は主に、飼育環境、この小動物舎の環境整備を担当しています。この夏は奈良も非常に暑く、毎日外気温が 33 度を越えることもありました。空調設備はありますが、屋根がトタン屋根なので、ホースで 30 分おきに水を屋根に撒き、ペットボトルや保冷剤、タオルを凍らせて扇風機の風を当てるなど、室内温度をとにかく下げることに取り組んでいます。



私がこの小動物舎に来て初めての日、「ポンちゃんの命を守るプロジェクト」という壁新聞が目に入りました。武井先生が分教室の生徒と取り組んできたことが書かれてありました。私は分教室のみんなが守ってきたことを引き継ぎたいと思いました。

はじめは、作業効率を考え、管理することができれば良いと単純に考えていました。淡々とウサギのケージの中にあるトイレを外していくと、当然、私の手が入ってくると移動しなければならず、私が手を入れようとするとウサギたちが暴れるようになりました。それを見ていた武井先生に

「もし、あなたが巨人に飼われていて、急に部屋に手が入ってきたらびっくりするでしょ。ウサギだってモルモットだって同じです。今から何をするのか『言葉なんて通じない』ではなくて、伝えようということからです。」と教わりました。先生は、ウサギやモルモットの名前を呼び、「掃除させてね。」と言葉がけをしてから手を入れていました。動物の気持ちを考えるのであれば、どんな取り組み方をするのかが大切だと知り、毎日の管理の際やチモシーの補充をする際にそれぞれの名前を呼ぶようにしました。そうしているうちに、どうすれ

ば彼らが快適に過ごせるのか考えて取り組むようになりました。



自分自身が色々なことで考えがまとまらない時、彼らのケージに顔を近づけると、すぐにそばに来て、寄り添ってくれます。疲れた気持ちが癒やされていくのを感じます。そして慰めて貰っていると思います。今は、彼らの生活する環境が少しでも良くなれば、少しでも綺麗にできればきっと健康でいてくれると思い、管理をしています。ウサギやモルモットに会えない日は寂しいと感じるようになり、気持ちの変化が起こっているのだと気が付き、考え方は変わっていくものなのだと実感しています。

今は、彼らに対してもっと優しい気持ちになりたいと思える自分がいます。喜んでくれる気持ちに応える仕事がしたいと思えるようになりなした。

【南部のどか】

室内の温度チェックを 1 日 2 回担当してくれていましたが、本年度より、自身の体調管理に重点を置くこととなり、今回はスライド等発表のお手伝いをします。

まとめ

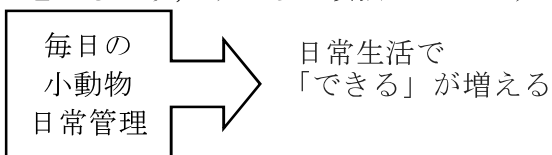
4 名の繰り広げる毎日の飼育管理は、まさに「トライ・アンド・エラー」です。

「トライ・アンド・エラー」を繰り返し、繰り返し、何か発見していく。

- ・管理に洗濯があったから、タオルが干せるようになった。
- ・毎日、綺麗にすることを目指して、お皿洗ううちに、洗い物が少しできるようになった
- ・掃除機のかけ方がわかった。
- ・毎日ウサギやモルモットに会うために自分が健康でいなければならないと気づいた。
- ・みんなと情報を共有しなければならないことがわかった。

第 25 回研究大会

など、毎日、動物のためにしてあげたいことが、自分の自立に結び付いています。とにかく「PDCA」サイクルになっていることを願い、三歩進んで二歩さがっても、一歩は進めるよう、みんなで頑張っています。



この夏、彼らは農業クラブのⅢ類のプロジェクト発表に取り組ませていただきました。その中でアニマルウェルフェア（動物福祉）についても学びました。人間の福祉も動物の福祉も共にしあわせに生きられることを目指しています。人間も動物であることを意識し、共生を大切に考えていきたいと思います。

おわりに

生徒たちは、この挑戦を見守ってくださる山辺高校の校長先生並びに教頭先生、そして諸先生方に支えていただきながら多くを学び、奈良県獣医師会、エキゾチックアニマル専門の獣医師の方々にお世話になり、地域の町づくり協議会の方々に相談させていただきながら、農業クラブの活動を続けさせていただいています。

動物という命を学ぶということは、「教育、医療、地域」この繋がりがなくしてありえないと言うことを、実感する毎日です。

毎日の小さな取り組みであっても、その積み重ねは何かを変化させてくれます。そして誰かの心がそれに気づいてくれて「協力」という宝物が生まれます。

今年の夏が予想以上に猛暑で、小動物舎の室内温度をどうしてもあと1度でも下げたい思いで生徒たちがトタン屋根に20分おきに水を撒く姿を見守ってくれている動物担当の若い先生が、「水撒きの他に何かできることはないか」と、毎日この生徒たちと一緒に、試行錯誤を繰り返して下さっています。この姿をしっかりと支えてくださっている教頭先生が、今回、私たちの発表のために、同行してくださいました。この「協力」は本当に心強い宝物です。

今回、このような素晴らしい勉強の場を私たちに与えてくださった、全国学校飼育動物研究会の皆様、私たちを応援し、導いてくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この学びを忘れず、これからも努力していきます。本当に有難うございました。

(※奈良県立山辺高等学校自立支援農業科
※※奈良県立高等養護学校教諭)